【研究ノート】

中川小十郎の先考顕彰と太田亮

長谷川　澄夫

はじめに

立命館大学文学部は創立から八〇年近い歴史をもつが、創立の背景や創立期の姿については不明の部分が多くある。『立命館百年史』には昭和初期の学園について、「文学科の整備」として一項を立て、文学科（後年の文学部）の創設の端緒となる経緯を次のように述べている（一）。

私立京都法政学校として発足した立命館は、いうまでもなく法科教育に力点を置いた学園運営を進めてきた。その建学以来の基本姿勢は夜間大学が設置された昭和初年においても原則的には変わっていない。（略）一九三一年、夜間大学が開設されたのと時を同じくして文学科教育の拡充が図られたのは、それ（法科以外の分野拡充―筆者）を物語るものである。しかし、あえてこの時点で文学科の拡充に力を入れることになった理由は何か。それはおおよそ以下の点にまとめられよう。第一に、法科万能主義に対する懐疑が社会的風潮となりつつあったことである。（略）第二に、右（第一―筆者）の点と関連して、文

学科を設置しようという機運は、かねてより学内に流れていたということである。それが昭和初年の段階に至って実現の運びとなったのは、当時の社会的風潮であった国民の実学志向に対応して、国語漢文に関する専門の学術とそれに付随する倫理、論理、哲学、国史、東洋史、法制、教育学などの科目を設置し、中等学校の国語漢文教員志望者を養成しようという狙いを前面に打ち出したためであった。さらに国語漢文教育の場の設置は、学生の実学志向への対応とともに、当時の学生思想の左傾化を防止しようという中川館長が繰り返し述べた立命館の理念に即応したものでもあった。

右の記述からは、文学科設置の契機はおもに戦前期の世相や社会的風潮のなかにあったこと、実学を尊重する世相の中で国語漢文の教員養成の夜間大学として発足したこと、さらにそのことが中川小十郎が懸念する学生たちの左傾化防止とも合致していた、とまとめられている。しかし、中川にとって「文学科」とは、単に「左傾化防止」のためのみの文脈で位置づけられるほどの単純なものであったとは思われない。

中川には『自伝』や『伝記』がなく、彼の思想をのべた書物や書簡もまとめて残されていないため、中川の思想や行動には不明のことも依然多くある。ただし、中川は東京遊学時代には、夏目漱石らとも交流し、山田美妙とも親交を結んだ文学青年であった。また天田愚庵とも親交をむすび、その評伝も著す文人でもあった。こうした経歴は昭和期においてもなお留意する必要があろう。

一九二七（昭和二）年、中川は「系譜学会」を創立、自ら会長に就任している。そして京都法政学校創立期の出身生である太田亮を招き、雑誌を刊行しはじめる。中川がこうした系譜研究に没頭したのはなぜか、ま

た中川に見出された太田とはどのような学者であったのか、中川と太田の軌跡を追ってみる。本稿は二人の足どりをたどる中で、立命館大学文学部（文学科）創立の背景を探ろうとするものである。

本稿の作成にあたっては、立命館 史資料センター所蔵の「中川家史料」を活用した。(二) また立命館大学平井嘉一郎記念図書館貴重書庫所蔵の中川小十郎関係史料の一部を紹介させていただいた。あわせて、文末尾に付した中川小十郎と太田亮の略年譜を参照していただければと思う。

なお、本稿では中川姓者の混同を避けるため、名で表記した。あわせて氏名表記については原則として新字を用いた。

第一章　中川小十郎の先考顕彰

中川小十郎の先考顕彰とは、西園寺公望に従い山陰や北陸の戦いに従軍した先考をはじめとした郷里の人びとの維新の功業を顕彰することである。その功業とはすなわち先考が西園寺公望に忠節を尽くし、勤王をいかに全うしたかを示すことであった。小十郎は先考の西園寺公望への「忠節」の事績を明らかにすることによって、維新勤王の功業を顕彰しようとしたのである。そのために郷里に先考顕彰の「清声千古」碑を建立し、また『戊辰唱義録』冊子を刊行することによって、「孝行」の範を地域や立命館の学生たちに示そうとした。中川は先考や自らの西園寺への忠節について立命館の生徒たちに範を垂れ、教学の支柱としようと試みる。

第一節　西園寺公望と中川家のひとびと

慶応四（一八六八）年正月、山陰道鎮撫使として西園寺公望が薩長兵とともに馬路村に進駐、小十郎の養父武平太や実父禄左衛門は人見龍之進とともに両苗（人見氏・中川氏）の代表として近隣の郷士たちを組織して「弓箭組」を結成し、西園寺の山陰道鎮撫に従軍した。叔父百助や母方の叔父の中川謙二郎らは西園寺に従い北越の戦いに従軍している。中川家の人びとは戦陣で西園寺に近侍して、維新の功業をとげたことを名誉としてきた。先考たちの西園寺に対する忠節を、中川小十郎は家門の誇りとし、昭和期には先考の維新の功業の顕彰をおこない、丹波の青年たちや立命館の学生たちに忠孝と勤王の思想を説こうと努めた。

明治維新の後、中川家の人びとは馬路村にあって村政のリーダーとして、旧郷士仲間の一員として農家経営にもはげんでいた。叔父の謙二郎は西園寺に従い東京へ出て教育の道に進む。謙二郎に従って東京に遊学した小十郎は帝国大学を卒業し、文部省に入省し官界へ進んだ。一八九五（明治二八）年八月、西園寺公望が文部大臣に就任すると小十郎は若くして大臣秘書官に抜擢される。小十郎の昇進を郷里の人びとはたいへん喜び、小十郎もまた、先考に倣い西園寺に仕えることを誇りとしたであろう。

以後小十郎は、官僚として、財界人として、家政秘書として、常に西園寺に近侍して忠節を尽くす。小十郎が樺太や台湾にあったときは、西園寺の実弟である末広威麿を立命館の理事としてむかえるなど西園寺家との絆を大切にしていた。

それでは、小十郎が先考の事跡調査をおこない、その顕彰を本格的に行なおうとした契機は何であったのであろうか。

明治の末年は、中央の官界や樺太にあった小十郎にとっては郷里を省みる暇のないほど多忙であったであろう。一九一二（大正元）年九月、樺太庁から台湾銀行副頭取に転じると、民間人となり東京や京都への往来などの自由も増したと思われる。時代も明治から大正へと変わった一九一三（大正二）年正月、小十郎は馬路の実家の人びとにあてた年頭の書翰で、自らの五十路の決意を述べている(三)。

拝啓本年ハ諒闇中ニ付年賀状モ差シ上ケス候、先々無事御超歳奉賀之至ニ奉存候、小生ハ本年ハ五十路ニカヽル事ト相成リ申候、何一ツ纏マリタル事モ無之、今日ニ及ヒ夢ノ心地致シ候、今後十年間ト見テ何カ一仕事致シ度キモノト存シ候

何を為すべきかは触れていないが、実父に決意のほどを述べている。外地台湾での抱負か、官界への復権か、自らの学校経営への抱負か定かではないが、先考が西園寺に近侍した維新から五〇年ほどが経っていた。

この数年後、郷里の馬路村では先考が相次いで亡くなる不幸が続いた。

一九一五（大正四）年一二月、実父禄左衛門が亡くなる。小十郎はその葬儀の喪主を務めている。また織田萬の撰文による禄左衛門の墓誌を刻んだ墓碑を建てている(四)。

さらに一九一六（大正六）年五月には養父武平太が亡くなっている。立命館大学平井嘉一郎記念図書館の貴重書庫史料の一つに、「故従六位中川武兵太重明自書伝」と箱書きされた巻子一巻がある。箱裏には「先考大患ノ後数年此自伝ヲ書シ漸ク了ツテ便所ニ赴キ卒倒遂ニ再ビ起タズ、真ニ是レ其絶筆ナリ　大正六年五月

廿六日　嗣重興」とある。これは武平太が罫紙にまとめた履歴と思われる史料を貼り接いだ巻子で、武平太のまとめていた記録を小十郎が表装したものと思われる。中川家史料にはこの元となった関連史料も残されている。巻子の前半には従軍関係の記録と史料がまとめられている。

一九一八（大正七）年一〇月には生家の家督を継いだ叔父百助も亡くなっている。百助の没後、その追善として一〇〇円が立命館に寄付されている(五)。また新政府軍の下賜品と思われるミニヘール銃一〇挺も後年立命館に寄贈されている(六)。

このように郷里での葬祭が相継ぐ中で、家政関係の文書の整理や郷里の人びととの交際の機会が増えたことが、小十郎が西園寺公望に近侍して従軍した先考の事績を振りかえる契機となったのではないだろうか。

第二節　先考顕彰碑の建立

一九二二（大正一一）年、中川小十郎は台湾銀行頭取に就任するが、この年は立命館が大学昇格を行なった年でもある。小十郎は大学昇格を記念して、先考の業績を顕彰するために二つの事業を行う。ひとつは郷里の馬路村に先考の顕彰碑（「清声千古」碑）を建設すること、もうひとつは先考顕彰の冊子（『戊辰唱義録』）の刊行である。

小十郎の出身地の馬路村の一画には、今も「清声千古」「中川人見戊辰唱義碑」と刻まれた大きな石碑が屹立している(七)。竹越与三郎の撰文による碑文は、「徳川氏国家ヲ擅制スルコト二百五十余年」に始まり、人見・中川の両姓の人びとの山陰道鎮撫従軍の事績を述べ、

皆実家ヲ捐テ王事ニ奔走ス維新ノ業成ルノ後各士族ニ編入セラレ退キテ復タ農桑ヲ励ム思フニ両姓同風轍テ合シ忠義廉節一門ニ崇ル其苦節至行実ニ縦欽崇禁ズベカラザルモノアリ今中川武平太ノ嗣小十郎君同姓ノタメニ碑ヲ建テ余ニ嘱シテ其勤王ノ蹟ヲ記サシム後世子孫其心述ヲ追懐シ慨然トシテ興起スルモノアラバ両姓殉国ノ志千歳猶ホ磨セズト云フベキモノナリ

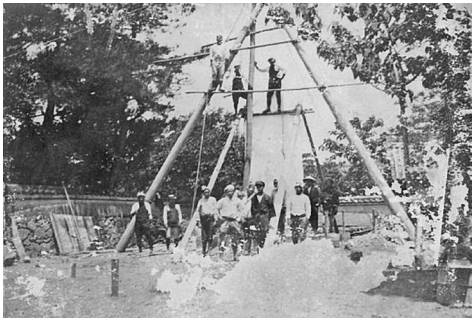
大正十一年二月三日

と結ばれている。

中川家史料には碑石建立に関わる史料が多く残されている。設計や碑文の選定、石材の購入や運搬については小十郎がおこなっているが、現地の工事については生家の若き当主である甥の摂太郎に委ねられていた。摂太郎宛の小十郎書翰や、工事の進捗を報告するためのスナップ写真なども残されている。

生家史料にのこされた小十郎の書簡から、碑石建立事業の進捗の様子をたどってみる。小十郎から摂太郎に出された一九二二（大正一一）年一月三〇日付の最初の書翰（八）には

拝啓維新ノ際我カ両姓一同ノ微力ヲ致シ候事ハ御承知ノ通ニ御座候処、



「建碑作業中のスナップ」（中川家史料 44821）

其ノ関係者ニ於テ実父・養父ノ二名ノミ叙位ノ御沙汰ヲ拝シ、其他ハ何等特別ノ御取計ヲ受ケル機会無之候事ナレバ兼テ御内談致シ候通リ一日ノ勤王事績ヲ石ニ刻シ之レヲ百年ニ伝度ト存ジ篆額ヲ西園寺公ニ相願ヒ御下付ヲ受ケ、撰文ヲ竹越与三郎氏ニ依頼致シ、已ニ出来シ、公爵ノ高閲ヲ受ケ目下石材ノ取調中ニシテ一日モ速ニ竣工致シ度懇望致シ居リ候、就テハ其建設地ヲ決定スルニ必要アリ、先日京都弊宅ニ於テ中川敬造殿ニ面会致候節ハ中川祖神社境内宜シカラント申シ居リ候ヘトモ猶考フルニ両姓ノ維新事績ハ一族間ノコトニアラズ、一村内ノ事績トシテ伝フベキ筋ノモノナレバ第一位置トシテハ虚空蔵堂南西ノ処尋ナレバ至極宜シカラント存候、併シコレハ村会ノ決議ヲ必要ト存スベシ、尤モ諸費用ハ一切小生ニ於テ負担シ建設ノ上之レヲ村ニ寄附スル順序ト相成リ可申、村ニ於テハ村ノ公園トモ云フベキ右境内ニ保存シ永ク偉観ヲ添フルヲ得ル次第ニテ碑ハ高サ約一丈幅約六尺位ニテ字数一千余経費ハ建設費ノ□ヲ加フレバ四千円ニ達スルナラント存候右中川敬造殿トモ御相談ノ上浅田村長ニ御相談ナサレ候事万ニ一村方ニ於テ村有公園ニ建設ニ同意ヲ得ラレサル時ハ祖神社境内ト存シ候モ地所狭クシテ如何ニモ不適当ニ付キ或ハ貴方地所ノ南西ノ角即チ街道ニ面スル所ニ建設シテハ如何ト存候、四辻邸ハ辺地ニテ不適当ニ有之候右至急御相談ノ上何分ノ御返事下サレ度候、早々

一月三十日　中川小十郎　　中川摂太郎　様

小十郎は先考の叙位をうけてその顕彰を行おうとしたこと、碑文は西園寺の篆書を得て、竹越与三郎に撰文を依頼、建碑は村有地である虚空蔵堂に建て、建碑費用は小十郎が負担することなど、この事業の構想を

伝えている。

以後小十郎は摂太郎に宛てた折々の書翰によって建碑工事の指示をおこなっている。二月一九付書翰(九)では「今回建碑ノ事ヲ人見龍吉君ニ御話シ置キ下サレ度候、維新の事ハ人見龍之進殿尽力最モ大ナルモノ有之候」と人見龍之進の子孫への配慮を指示、三月二七日付書翰(一〇)では、用地取得に「数千金ノ支出ヲ辞セサル次第ナレバ敷地買収ハ全部小生ニ於テ支出スルコトニ致シ度」と述べたうえで、「若干ノ資金ヲ加ヘテ財団法人トナシ此法人ノ役員ニ我カ一族ノモノノ外同姓ノ元老ヲモ加ヘ、之ヲ永久ニ保有スルコトモ一案ト考ヘ居リ候」と両姓の同族祭祀組織の法人化の提案を行っている。六月一日付書翰(一一)では「除幕式ハ立命館大学昇格祝賀会ト同時頃」と報知し、六月二十五日の「大学認可祝賀会招待状」(一二)が届けられているが除幕式は一旦中止されている(一三)。

建碑事業がほぼ完成の目途がついてきた七月、小十郎は摂太郎にあてて書翰を送っている(一四)。

実父叙位ノ関係書類ニヨリテ御詮議ナリシコト之有候、村役場ニ在ル書類ニヨリテ然ルベク了取計ニサレ度候、亡父自作ノ自伝アルモコレハ京都宅ニ在リ、又他人ニ示スコトモ如何ト存候、御含ミ置キ下サレ度候、両亡父勤王ノ次第ハ両姓ノ勤王録中ニ明記致シ居リ候、只今編纂中ニ有之、八月中ニハ出来ノ積ニ候、除幕式ハ九月ニ入リ挙行致スコトトシテハ如何覆布ハ都合ニテ取リ除キ下サレテモ宜シ、式ノ当日強テ除幕ノ手続ヲセズトモ単ニ披露ヲ致スコトトシテモ宜敷候、中川敬造殿ト御相談ノ上然ルベク取計下サレ度候、小作関係ノ問題取調ノ為ニ御上京ノコト聞ナルベキモ暑中ニ及バズ秋季ニセラレテハ

如何ニ候ヤ、小生ハ当面ノ方法トシテハ地主タルモノガ各自ラ耕作ニ従事スルコトガ急務ト存候、少々傭人ヲナシテモ自ラ耕作ニ従事スルコトカ何ヨリノ解決法ト存候暑中御用心ナサルベク候、

先考の叙位関係史料などを村役場で確認することを指示しているが、「亡父自作ノ自伝」とは前述した貴重書庫の巻子史料のことであろうか。「両姓ノ勤王録」とは『唱義録』の冊子のことで、ほぼ完成間近であること、除幕式の心算などについても指示している。「小作関係ノ問題」とあるのは、このころ口丹波地域では農民運動の高揚期で、馬路村に於いても同様の動きがあった。農民運動に対する小十郎の考え方は「当面ノ方法トシテハ地主タルモノガ各自ラ耕作ニ従事」と、小作農民に対し敵対することなく、穏健な自作農育成を考えていたと思われる(一五)。

九月になると除幕式の準備確認の電報が届き(一六)、一〇月二五日に馬路村で除幕式が挙行される。一一月二三日付書翰で(一七)「当初以来一方ナラズ御尽力相願ヒ幸ニ諸事終了、其志ヲ遂グルコトヲ得候段有リ難ク存候」との礼状が届けられているが、その後半には

村ニ於ケル遺族方ノ様子ハ相分リ不申候ヤ、様子御一報下サレ度候、又村内両姓ノ人ビト及ビ両姓以外ノ人々ノ本件ニ対スル意見ハ如何ニ、実ハ碑文中ニ氏名ヲ載スルコトヲ得サリシ人々ノ遺族及ヒ全然氏名ヲ載セザリシ人々ノ遺族等ニ於テモ、幾分カ不備ヲ免ガレザルベク小生ニ於テモ気ノ毒ニ存候

と述べて従軍者の名簿の脱漏の懸念を伝えている。建碑事業を終えた中川にとっての気懸りは従軍者氏名の脱漏であった。また、明治維新に活躍した郷士たちを顕彰する碑石ではあるが、すべての馬路村の人たちが称揚するものではなかった。村民の多数をしめる他姓の人たち、従軍せず村に残留した人たち、旗本の代官として拘留された人たちなど、村内のさまざまな人びとのなかで中川と碑石の評価も一様ではなかった。また、小十郎が顕彰碑を建てたころの口丹波の動静も、農民運動の高揚など村内各層に複雑な状況がうまれていた時代でもあった（一八）。

第三節　『中川人見両姓戊辰唱義録』の刊行

碑石の建立とあわせ、小十郎は先考顕彰の『中川人見両姓戊辰唱義録』と題した冊子を刊行している。この冊子を除幕式の参列者に配布するとともに、村内の人たちや、翌春の立命館の卒業生にも配布している。

冊子の冒頭には「予今回中川人見戊辰唱義碑を建設したるに付当時の事情を説明したるものを其の関係者の子弟諸氏に頒つ」と刊行の趣旨をのべ、碑文の写真、碑文の表面・裏面を紹介している。小十郎述になる本文は、建碑の経緯を記した「緒言」につづき、中川・人見の両姓の由緒、山陰道鎮撫従軍の経過、弓箭組の由緒をまとめている。

冊子の後段は、総督随行日誌として、実父禄左衛門の「御一新勅使御発行日誌」の翻刻史料を掲載している（一九）。日誌の記述は一八六八（慶応四）年正月五日の馬路村発陣から始まり、三月二八日の京都帰還に終わる。

冊子の末尾は「郷土の青年に望む」と題され

わが両姓が率先して勤王の義軍となり入丹した園公の羽翼となったのは南朝時代の歴史を飾る忠烈なる志士仁人の事跡と相譲らざる忠節（略）此一郷の溌剌たる元気と高邁なる道義的精神こそ予が全郷の後進子弟に期待する処

と述べている。

簡易製本の本冊子は「中川家史料」のなかに虫損のものも含め数冊あり、村内の各所にも残されている。立命館大学平井嘉一郎記念図書館の貴重書庫史料の中に、黒塗りの二箱の漆箱に収められた二冊の『戊辰唱義録』の冊子が保管されている。箱蓋の裏書には

大正一一年一〇月三日　明治維新ノ際実父禄左衛門重直公養父武兵太重明公等一族ノ者ヲ率ヒ西園寺ノ旗下ニ参シ勤王奉公ノ事跡ヲ子孫ノ為ニ記述ス、子孫タル者之ヲ珍蔵愛読シテ其志ヲ継承シ永ク違フ所アルベカラズ　昭和二年八月五日　中川小十郎重興

と墨書されている。もう一つの箱裏もほぼ同文であるが、末尾は

勤王ニ奉仕ノ事情を明述シ（略）永ク帝室ニ対スル奉公ヲ怠ルベカラズ

と、小十郎の手で認められている。

一九二七（昭和二）年八月に、小十郎がなぜこの冊子をあらためてどこに献納しようとしたのかは不明である。翌年の昭和天皇の即位大典をむかえるにあたって何か考えるところがあったのであろうか。

第四節　中学校生徒の史蹟研究

台湾の勤めを終えた小十郎は、立命館の教育や経営に積極的に参画していく。とりわけ中学校や商業学校の生徒たちには、自らの青少年時代の回想を生徒たちに親しく語るなど（二〇）、おりにふれて講話の機会をもち、好好爺然とした一面を覗かせることもあった。また、先考が西園寺の近侍として戊辰戦争に従軍した事蹟を顕彰することによって、興津坐魚荘の西園寺家政を取りしきる秘書として近侍する自らの姿と重ねあわせ、立命館の学生たちに示そうと模索していたのではないだろうか。

昭和戦前期の立命館の特色とされるのは学生・生徒たちの「禁衛隊」の活動である。一九二八（昭和三）年の京都御所における昭和天皇の即位の大典に際し、御所の自主的な警衛活動をおこなったもので、勤王精神の模範とされた。禁衛隊発足当初は明確な目的を持ったものではなかったが、やがて「禁衛隊精神」として定式化されていった（二一）。

昭和三年今上陛下御即位の大礼を行はせらるるに当り、恐れ多くも立命館の本拠が清和門外の屹立てゐるのも亦昭代の余沢に外ならぬからは、学園が挙って御所の警衛に当たるのが臣子の本分であらうと考へ、之と同時に端なくも西園寺公が慶応四年勅命を蒙り山陰道鎮撫使として出陣せられた当時のことを追想して、この禁衛隊の編成を企てたのであった（一二）。

とまとめられ、西園寺に近侍した先考の事跡が勤王の手本とされる。丹波弓箭組の調練や平安神宮時代祭行列の風俗を模した鼓笛隊の活動は世人の目に止まり、生徒たちにとって馬路村は「勤王の聖地」とされるにいたる。生徒たちの行動は、小十郎の先考顕彰の意図に学んだものか、あるいはその意図を超えたものか、検討に値するだろう。

中川家の生家史料のひとつに『史蹟研究』誌がある（一三）。一九三四（昭和九）年九月の第一号から一九三六（昭和一一）年一一月の二〇号まで、約一〇頁ほどの孔版刷りの同人誌である。発行は耕人会で代表は立命館予科教授・立命館中学教諭の石崎達二である。この会は中学校の生徒たちの史跡踏査のサークルの会誌で、第一回は豊国神社、翌月は垂仁天皇陵・薬師寺と、京都市内や近郊の名刹の見学や皇陵巡拝の活動をおこなっている。一九三五（昭和一〇）年七月には中川摂太郎の案内で馬路をおとずれ、唱義碑の見学などをおこなっている。この会は一九三五（昭和一〇）年六月に「史蹟研究会」と名称を改めているが、会の賛助人は中川摂太郎や塩崎達人ら中学校の教員五人、会員は中学校・商業学校・大学生・交友二〇人の名簿が残されている。この会や会誌のその後については不明であるが、学生の自主活動として継続していたようである。『立命

禁衛隊』誌にも、皇陵巡拝や史蹟見学の記事が掲載されており、馬路訪問の特集が組まれている。

『史蹟研究』を主宰した石崎達二は中川の意向をうけ『西園寺公望公山陰道鎮撫日記』の出版を計画している。活版刷一五九頁の冊子を一九四〇（昭和一五）年に立命館出版部から刊行の予定であった。写真・地図も添えられ、中川の校閲も終え、刊行直前まで作業は進んでいたようであるが未刊に終わっている（二四）。

第二章　中川小十郎と太田亮

台湾での勤めを終えた小十郎は立命館の文学科系教育の充実をめざして取組みをすすめる。小十郎自身、国語教育や文学論についての造詣も深く、また先考顕彰の取組みを通して国史にも大きな関心をよせていたからでもある。一九二六（大正一五）年には立命館大学出版部も開設され、学園の拡大をはかろうとしたようである。しかし規模の拡大によって、教育の理念や研究の水準を落とすことなく、優れた人材を立命館に求めようとしたのが小十郎の姿勢であった。

第一節　太田亮の姓氏研究

太田亮（あきら）は昭和初期の日本古代史家で姓氏研究をおこなった在野の歴史家である。

太田は草創期の立命館（京都法政学校）に学び、その後神宮皇學館本科を卒業、山梨県立高等女学校に勤務する傍ら、『姓氏家系辞書』を上梓している。一九一九（大正八）年から三年間内務省神社局考証官補として勤務、一九二二（大正一一）年に退任、神社に関する調査事務取扱の嘱託となり著述業に専念する。

太田は内務省に籍をおき、神社調査を行う傍ら、一九二一（大正一〇）年に「系譜学会」を組織し、会誌『系譜と伝記』(二五)を創刊している。創刊号に掲載された賛助員の名簿には、内務大臣の床次竹二郎はじめ塚本清治（神社局長）・上田万年（国語学者）など錚々たる顔ぶれの氏名が列挙されている（表1）。その多くは西園寺系の政治家や三上参次など大正期の実証主義的な学者であった。

会誌によれば八〇〇名をこえる全国各地の読者から姓氏の由緒にかかわる投稿が寄せられている。しかし一九二五（大正一四）年には嘱託も辞し、『日本国誌資料叢書』の編さんの事業にとりくみはじめ、その後雑誌の経営も不振に陥り、一九二七（昭和二）年に廃刊にいたっている。

太田はいくつもの神社の由緒調査の嘱託として糊口を凌ぎ、一九三一（昭和六）年からは代表作となる大著『姓氏家系大辞典』の執筆に専念、ようやく一九三四（昭和九）年に一巻を、同年二巻、一九三六（昭和一一）年に三巻をもって完成させている(二六)。

太田は自らの研究を振り返り「一切他の事業を捨て専心本書の編纂に従事してより満六年（略）、書いた原稿は六万枚を数えた」という。子の通昭は「骨と皮の痩せた身体で、よくも毎日毎日書斎に閉じこもって書

表1　系譜学会　賛助員
大正10年3月『系譜と伝記』創刊号

内務大臣	床次竹次郎
内務次官	小橋一太
神社局長	塚本清次
考証官	荻野仲三郎
	宮地直一
文学博士	井上哲次郎
	上田萬年
	三上参次
	三宅米吉
	芳賀矢一
	三浦周行
	黒板勝美
	辻善之助
	渡邊世祐
史料編纂官	和田英松
	八代国治
台湾総督秘書官	喜多孝治
	名取忠愛
子爵	清岡長吉
陸軍少将	井戸川辰三
	桑原桑樹
	森田実
	安藤正次

いたものだ。（略）父は学会では傍系者であったため、疎外視される面が多く、研究室の利用、史料の収集にも困難があったようで、特に経済的には困窮し、補助者を雇うこともできず、すべてのことをひとりでやらなければならなかった」と回想している(二七)。

刊行間近かのころか、太田は小十郎に「姓氏家系大辞典編纂事業は先づ大体終を告げ候、されど組は初校三五七五四頁にて猶ほ残り千頁位は御座候はんと存じ候、財物枯渇して借金のみ徒に多く、完成も唯歎声を残すのみに候」と経済的な苦況を書き送っている(二八)。この報に小十郎がどのように対処したかは不明であるが、校友の苦境を放置することはなかったであろう。太田の研究と著述の援助をおこなったのが中川小十郎であった。

第二節　中川小十郎の援助

中川小十郎は先考顕彰の冊子『戊辰唱義録』を刊行して後も、より精力的に自らの家系調査を継続していた。中川家の生家史料には茶封筒に入れられた中川家に関する系譜関係史料が多く残されているが、封筒の表に小十郎の手で史料名が墨書されたものが多く残されている。小十郎にとって、先考顕彰に際して維新の従軍者氏名の脱漏の懸念があったからであろう。先考の事績の顕彰を学園の理念とするとなれば、その史実の究明、系譜の調査はなおさら重要なことであった。そのような中で小十郎が先考研究の協力者として迎えたのが太田亮であった。

一九二七（昭和二）年六月、『立命館学誌』第一〇六号に太田は校友の肩書きで「古史年代の新研究」と題

して研究発表を行っている。同誌には「著述家　太田亮」が推薦校友規約により校友に推薦されたとある。また同年五月には東京築地の「金水」で立命館中学及大学出身者を母体とする「立命館文筆家有志懇談会」が開催され、太田も末席に名前を連ねている。

一九二七（昭和二）年八月、前述の『系譜と伝記』は『国史と系譜』と改題され、雑誌の体裁や通番は前誌を踏襲しているが、「系譜学会」の機関誌として刊行される。興味深いことは系譜学会の会長には立命館長・貴族院議員の中川小十郎があたり、評議員には実業家の池田成彬など、賛助員には上田萬年・辻善之助など錚々たる学者が名を連ねている（表2）。この顔ぶれのなかに、中川の系譜研究と系譜学会への並々ならぬ思いを見て取れる。

『国史と系譜』の創刊号（八月号）に小十郎は「愚庵和尚鉄眼禅師」と題して寄稿している。太田は「中川氏と津田氏との関係」と題して寄稿しているが、以後太田は毎号のごとく中川氏の系譜にかかわる論考をよせている。

表2　系譜学会役員（4巻1号）
（昭和2年8月号）

会長	立命館長　貴族院議員	中川小十郎
評議員	実業家	池田成彬
評議員	文学博士	上田萬年
評議員	衆議院議員	大口喜六
賛助員	早稲田大学教授	安藤正次
賛助員	台南知事	喜多孝治
賛助員	皇典講究所主事	桑原芳樹
賛助員	前内閣書記官長	塚本清次
賛助員	東京帝国大学教授	辻善之助
賛助員	民政党顧問	床次竹次郎
賛助員	文学博士	黒板勝美
賛助員	法学博士	小林丑三郎
賛助員	貴族院議員	竹越与三郎
賛助員	法学博士	中川孝太郎
賛助員	実業家	原邦造
賛助員	貴族院議員	南弘
賛助員	文学博士	三上参次
賛助員	前文部大臣	岡田良平
賛助員	内務文部嘱託	荻野仲三郎
賛助員	実業家	名取忠愛
賛助員	文部博士	松本愛重
賛助員	京都帝国大学教授	三浦周行
賛助員	高等師範学校長	三宅米吉
賛助員	文学博士	宮地直一
賛助員	神宮皇學館館長	森田實
賛助員	文学博士	和田英松
賛助員	文学博士	渡邊世祐
賛助員	文学博士	井上哲二郎
賛助員	衆議院議員	小橋一太

一九二八（昭和三）年五月三一日付の小十郎の摂太郎宛書翰（二九）では、小十郎は家系調査の経過を報告するとともに、「家系ノ調査今日迄多額ノ費用ヲ投ジ、書籍ノ買入レ、大田氏ノ月次手当等容易ナラヌ支出ヲ出シ居候」と書き送っている。また同年一〇月一三日付小十郎の摂太郎宛書翰（三〇）でも、家系について十数項目の調査依頼をおこない、あわせて

「国史ト系譜」ノ系譜学会ニ入会セラレ度、村方ノ諸氏ニモ勧誘下サレ度候、十一月号ニハ「藤姓中川」ノコトヲ書クトノコトニ之アリ、馬路中川ニ関スルモノニ有候、又月讀神社ノコトモ書クトノコトニ候、大田氏ハ大家ニ之レアリ、信用アル学者ニ候

と述べている。この年のものと推定される一一月三日付の摂太郎宛書翰（三一）では、封筒の裏面には「太田亮先生紹介　中川小十郎」と記し、「家系調査ノ為ニ太田亮君貴地へ出張相究申候ニ付御案内下サレ度候」と、中川家墓地や寺院への案内依頼している。太田は小十郎の紹介をうけ馬路を訪問、平野墓地・長林寺内墓地・中澤氏所蔵ノ古文書其他祖神社の実況調査をおこなっている。

一九二八（昭和三）年一一月、『国史と系譜』は『国史と国文』と改題される。雑誌の体裁や通番は前誌を踏襲しているが、創刊号となる通巻第四五号には、「改題の次第」として、小十郎が前誌との関連を述べている。

『系譜と伝説』で産れた本誌は、中途『国史と系譜』と改題し、既に五星霜を重ねたのだが、今回更『国史と国文』と改題することになった。系譜と伝記は国史の研究上に於ける重要な資料でもあって、系譜の研究に依って、正史の編年を一変せねばならぬ様な場合もある。（中略）国史としては国文を離れては其研究の完きを得こと難く、国史を離れては国文の研究も遂げがたいのである。（中略）本誌の篇輯は従前は太田亮君の独力に依ってゐたのであるが、新たに末尾記載の如く新進気鋭の十数氏を加へ、特に京都帝国大学文学部の吉澤文学博士に於て親しく其指導を任せらるることとなった。太田君が古代史と系譜の研究を担当せらるることは従前の通りである。

雑誌の同人代表として小十郎は、この雑誌が昭和天皇即位大典の記念となることを述べているが、本誌の同人には京都帝大卒の文学士一七人の名前が連ねられている（表3）。太田亮は系譜学会主幹としてその名前をのこしているが、同人の多くはのちに立命館大学文学部の教員として招聘された人びとが多く、この雑誌の巻頭論文の執筆者には江馬務・魚住惣五郎・中村直勝・牧健二など京都帝国大学国史研究室出身の人たちの寄稿が多く掲載されている。

表3　国史と国文同人
（昭和4年6月号）

法学士	中川小十郎
文学博士	吉沢義則
	秋山角弥
文学士	浅田善二郎
文学士	市川寛
文学士	今小路覚瑞
文学士	石崎達二
文学士	江間務
文学士	岡田希雄
文学士	片岡勇三郎
	小林連
文学士	清水泰
文学士	塩崎達人
文学士	鈴鹿登
	田中健三
文学士	徳重浅吉
文学士	中野武夫
文学士	能勢教明
文学士	渡部多仲
系譜学会主幹	太田亮

一九二八（昭和三）年の秋、「立命館大学文学会」は翌年六月第一回総会を開催しているが、その参加者は

「高瀬、吉澤の両博士を初め、加藤盛、浅田、清水、田中、鷹取、川又、中野、江馬、加藤順の諸先生」とあって、吉沢義則（国文・訓詁学）を中心とした国文学関係の研究者を軸に、立命館大学の文学部（文学科）が形作られていったようである（三二）。このような推移の中で太田は一歩身を引いた形で自らの著述に専念するところとなる。

第三節　太田亮の立命館招聘

中川の知遇を得て立命館の校友となった太田は自らの著作の執筆に邁進するが、ようやく一九三四（昭和九）年『姓氏家系大辞典』を上梓、同年立命館大学の国史講師として迎えられる。立命館における太田の履歴を略述すると（三三）

一九三四（昭和九）年　立命館大学　国史講師
一九三六（昭和一一）年　立命館内に歴史地理学会を起す
一九三七（昭和一二）年　立命館大学専門部教授
一九四一（昭和一六）年　立命館大学教授　文学部主事　立命館史学会創設
一九四六（昭和二一）年四月　定年制により解職　専任講師

この間、一九三六（昭和一一）年には鹿児島県史嘱託、一九三七（昭和一二）年には神宮皇學館嘱託を兼任している。

太田が任用される前年の一九三三（昭和八）年には「京大事件」がおこり、多くの法学部教授が立命館に

迎えられている。そして翌年には『立命館学叢』を『法と経済』と『立命館文学』の二誌にわかち、『立命館文学』が創刊される。中川は創刊号に「発刊の辞」をよせている。

立命館文学の目標とするところは多い。立命館文学は先ず日本的なるものゝ追求を以て第一となし、国文学、漢文、歴史、哲学、倫理、外国文学其他精神文化系統諸学科の根柢を明らかにし、以て過去現在未来に亙る日本精神の本質とその歴史及び歴史性の解明に努めようとするものである。

と述べ、従来の国語漢文の文学偏重から脱却して、精神文化系統諸学科の充実、研究機能の充実を求め、歴史に重点をおいた学科の構想を述べている。立命館文学の編輯委員は表の通りである（表4）。

自著の完成をみた太田もこの動きのなかで日本古代史の専門家として招聘されたものであろう。一九三六（昭和一一）年には、立命館では三五周年事業として国宝『御堂関白記』の復刻刊行、「西園寺文庫」の創設がなされる。同年発行の『三五周年記念論文集　文学篇』に太田は「平安朝に於ける社会組織」と題して論文を発表している（三四）。

一九三六（昭和一一）年、大学における学生の思想善導策を図るために、文部省教学局の教学刷新事業として「日本文化講義」の講座が各大

表4　『立命館文学』役員

昭和9年12月	
雑誌委員	32名
篇輯委員	浅田善二郎
	岡田希雄
	清水泰
	塩崎達人
	江馬努
	加藤盛一
	佐保田鶴治
（主任）	小泉苳三
篇輯顧問	高瀬武次郎
	野々村直太郎

昭和15年7月	
雑誌委員	16名
篇輯委員	浅田善二郎
	加藤盛一
	高倉克己
	清水泰
	橋本循
（主任）	太田亮

学において開講される。立命館でも一九三六（昭和一一）年は不明であるが、一九三七（昭和一二）年第一回講義「日本民族経済」（高田保馬　京都帝国大学）、第二回講義は「支那事変皇軍必勝ノ国史学的説明」と題して太田亮（専門部文学科教授）が講演している(三五)。

一九三八（昭和一三）年一〇月立命館では西園寺家秘蔵の国宝で西園寺家歴代の日記と記録『管見記』の復刻事業をおこなっている。太田は小十郎からそれを一任され、やりとげている。『立命館学誌』には「太田教授の御尽力により管見記百五巻の影印が完成」「国史学会への寄与甚大」と報じている。（二一〇号　昭和一四年二月）この事業は小十郎にとっては西園寺家の顕彰をおこなうことであり、文学部創設に向けた調査研究事業であった。また、太田にとっても古代史研究者としての確たる実績を得る機会となった。この頃の太田は立命館の教育や研究に没頭していたようである。一九三九（昭和一四）年九月一九日付の中川宛書簡には(三六)

六日夜無事上京仕リ七日は大学史料に参り候、吉村・小嶋・小坂等の諸君と会談仕候、その結果次の如くに候（中略）次に先達て御願ひ申上候ひし鹿児島行の件　小生としては義理合の為にて少しも行きたくは御座なく候、せめて唯今の中川系図研究終了後に致したく候為一寸延期を願ひ置き候」

と述べている。この時期の太田は『管見記』調査の佳境であったのか、東京での大学研究（東京帝国大学史料編纂所）での調査の模様を報知するとともに、委嘱されていた『鹿児島県史』編さんに躊躇するなど、多

忙な研究の模様がうかがわれる。

『管見記』の研究を終えた太田は、『立命館文学』に次々と投稿している。

「慶壽院法皇と慶壽院右大臣」（五巻五号　一九三八年）

「西園寺家北山第考」（六巻二号　一九三九年一二月）

「美濃中川御厨中川氏の大神宮崇拝」（七巻二号　一九四〇年七月）

「贈従四位中川淳庵先生と玄隆先生」（七巻三号　一九四〇年一〇月）

このように立て続けに寄稿するとともに、一九三九（昭和一四）年からは小泉苳三のもとで編輯委員となり、一九四〇（昭和一五）年の七月からは編輯主任となっている。これら一連の投稿や人事は、歴史的な研究に重きをと考える中川の意向もあったであろう。

一九四一（昭和一六）年、立命館大学部並専門部学則の変更が認可され、「国体明徴ヲ徹底スルタメ国史ヲ中心トスル文学科ヲ設置ノタメ」新たに文学科が設置される。文学科は当分の間は夜間授業とされるが、専門的な学術研究にも応えるべく中川の構想が実ったともいえる。一九四一（昭和一六）年の教員一覧には、国史担当の教授として、白柳武司（秀湖）と並んで太田亮の名が挙げられている。中川の推挙もあったであろうが、太田は主事として文学科（文学部）創立の中枢を担っていた。

『立命館大学文学部の五十年』から戦時下の文学部や太田の姿をうかがってみる(三七)。

地理の藤岡謙二郎は一九三九（昭和一四）年から立命館の教壇に立ち地理のほか考古学も担当していた。文学科の設置にあたっては太田が藤岡を専任教官として推薦したと回想している。当時の太田は、国史通論・

神祇史・神道史を講じていたこと、学生の研究会として法文学部には史学会と地理学同攷会が、予科には史蹟踏査会があったことなども回想している。

一九四三（昭和一八）年に法文学部一期生として卒業した大八木正治（元京都府立高校校長）は、恩師の歴史科主任の太田亮について「おおらかで、お酒好きで、怒られない先生であった。大柄な先生は、当時既に等身に余る著作をものにされていた」と回想している。ある日の思い出として、「市電で国立の大学の前を通るとき、（太田が）一体この大学はあれだけの税金を使って何をしているのかと云われた」と太田が鬱憤を噴出させた光景を述べている。

一九四四（昭和一九）年二月、太田は中川の命を受けてであろう、教員無試験検定認可のため東京へ出張し、その報告をおこなっている（三八）。

文部省に参り各局課を訪ひ候が御蔭をもって学部文学科中等教員無試験検定の件無事確定仕り候、未だ官報の発表（少し遅るる由に候）御座なく候へど肩の重みの漸くとれし心地仕り喜悦の情に堪えず候、明日曜日には松原博士宅にそれとなく参るつもりに候、次に専門学校卒業者の中等教員有資格云々の専門教育局長談なるものは甚だ不確実の模様に候

と中川に書き送っている。戦時下の混迷する教学体制の中で文学部の使命として教員試験検定に奔走していた様がうかがわれる。

中川家史料には、「伝記資料」「伝記原稿」と史料名を付した史料群がある。その中には太田亮の筆になる原稿も含まれている。太田の履歴によれば、一九四三（昭和一八）年一二月に「臨時立命館編集室主任」に任命されており、中川の晩年には、小十郎の先考顕彰史料や小十郎の原稿や口述資料など整理が始められていたようである。しかし昭和一九年一〇月小十郎が亡くなり、「立命館誌編集」は「伝記編輯」に変更されたものか、太田は一九四五（昭和二〇）年三月「総長伝記編輯室主任」に任命されている。

しかしまもなく敗戦となり、その混乱の中で収集史料は未整理のまま残され現在にいたっている。

あとがき

立命館の文学部は、その創立の時代が戦争の始まろうとする時代であり、当時の立命館では「禁衛隊」の活動が華々しく、国家主義教育がおこなわれた暗い学園の印象が拭えない。その「禁衛隊」のモデルが、中川小十郎の郷里の「弓箭組」で、中川は国家主義的な教員を招いてその理論を構築し、戦時下の教育に積極的に関わった、という「常識」を持つ人も多く、筆者もその「通説」に従ってきた。

だが、先考の顕彰をおこなった小十郎の思想は、戦前には「常識」的な「忠孝」思想でしかなく、「忠節」とは、西園寺に近侍して忠節を尽くすほかなにごともなかったと思える。顕彰碑に刻まれた竹越の撰文もただ西園寺への奉公を通しての「勤王」の事績を称賛したものであった。昭和の大典を契機に、生徒や教員たちの中で禁衛隊のプロパガンダが活発におこなわれるが、必ずしも小十郎の指示したものではなかった。中学校の生徒たちには、厳しく・やさしく見守る小十郎の姿がみえる。

小十郎にとって、もっとも大切なことは、大学の文学部をいかに充実したものにするかということであった。文学科の創設にあたって、当初は京都帝国大学の教員を招き国語漢文系の学部として始まる。しかし小十郎には歴史を主体とした学部という想いが強かったのであろう、太田亮を招聘し、西園寺家の資料の調査・西園寺文庫の創設と、実証的な学術研究をすすめていった。太田亮も皇学館出身の無名の古代史・神道史の研究者ということで、ともすれば精神主義的な学風とも誤解されるが、つとめて実証的な研究と教育を期待されて立命館に招聘されたのであった。

しかし戦時下のこと、まもなく中川も亡くなり、ひと時代を経ることなく戦前の文学部（文学科）は幕を下すこととなった。

太田は一九四六（昭和二一）年に定年退職して立命館を去り、近畿大学（短期大学）へ転じ、一九五五（昭和三〇）年に専修大学に転じ、翌年七二歳で没する。戦後の立命館文学部では忘れられていた研究者ではあるが、立命館史学科創設の研究者・教育者であった。

中川小十郎の伝記研究や戦時下の立命館については不明なことも多く残されている。本稿は幕末維新期の弓箭組や、太田亮の人物研究ではないが、今後の研究の一助にもなればと思う。また史資料センター所蔵の中川家史料が、学園史や近代史研究の史料として活用されることを願っている。

表 5　中川と太田の略年譜

		中川小十郎の略年譜	太田亮の略年譜
慶応 2	1866	丹波馬路に生れる	
慶応 4	1868	先考の山陰道鎮撫従軍	
明治 17	1884	東京大学予備門に入学	奈良県に生れる
明治 26	1893	帝国大学卒業、文部省入省	
明治 28	1895	西園寺文部大臣秘書官	
明治 30	1897	京都帝国大学書記官	
明治 33	1900	京都法政学校創設	
明治 37	1904		京都法政大学予科入学
明治 39	1906	西園寺内閣総理大臣秘書官	京都法政大学退学、神宮皇學館入学
明治 41	1908	樺太庁	
明治 43	1910		山梨県立高等女学校教諭
明治 45	1912	台湾銀行副頭取	
大正 4	1915	実父禄左衛門没	
大正 6	1917	養父武平太没　先考の叙位	
大正 7	1918	叔父百助没	
大正 8	1919		内務省考証官補
大正 10	1921		『系譜と伝記』創刊
大正 11	1922	**「先考顕彰碑」建立『両姓戊辰唱義録』刊行**	内務省免官
大正 14	1925	台湾銀行頭取退任、貴族院議員	
昭和 2	1927		『国史と系譜』刊行、立命館校友
昭和 3	1928	「立命館禁衛隊」編成	『国史と国文』刊行
昭和 9	1934	『立命館文学』刊行	**立命館大学国史講師**、「管見記」編輯、**『姓氏家系大辞典』刊行**
昭和 15	1940	西園寺公望没	
昭和 16	1941	**立命館文学部創立**	**立命館大学教授　文学部主任**
昭和 17	1942		文学部長
昭和 18	1943		館誌編集委員長
昭和 19	1944	中川小十郎没	
昭和 20	1945		伝記編纂委員長　法学博士（立命館大学）
昭和 21	1946		立命館大学定年退職、近畿大学短期大学部教授
昭和 30	1955		専修大学教授
昭和 31	1956		太田亮没

注

（一）『立命館百年史』通史一（発行　立命館　一九九九年）四三五頁

（二）中川家史料は養家史料と生家史料に大別され、ともに立命館史資料センターに所蔵されている。その概要については、『立命館史資料センター紀要』創刊号に、寺澤優「二〇一三～一五年における中川家史料整理の概要と報告」としてまとめられている。10000・20000・30000番の史料は養家史料、40000番の史料は生家史料である。なお、本稿で紹介した中川小十郎書翰は、二〇一三年に中川小十郎研究の準備史料として、田村悠・寺澤優・長谷川の三名で翻刻していた下原稿したものを活用した。

（三）中川家史料43363　大正二年一月九日　中川老大人宛小十郎書翰『中川小十郎研究論文・図録週』（立命館史資料センター　二〇一七年発行）所収

（四）『立命館学誌』（創刊号　大正五年）所載

（五）中川家史料43492　大正七年一一月二一日　中川摂太郎宛財団法人立命館書翰

（六）中川家史料43491〔昭和八年〕中川摂太郎宛中川小十郎書翰

（七）『立命館百年史』通史一、三一二頁『西園寺公望揮毫の扁額・石碑を訪ねて』（学校法人立命館 史資料センター発行二〇一六年）碑文は『中川人見両姓戊辰唱義録』に収録　撰文を記した竹越は、西園寺系の政治家・明治大正時代の「文明史家」として著名で、大正一一年からは『明治天皇紀』編纂の中心となっていた。

（八）中川家史料43487　大正一一年一月三〇日　中川摂太郎宛中川小十郎書翰

（九）中川家史料43453　大正一一年二月一九日　中川摂太郎宛中川小十郎書翰

（一〇）中川家史料43412　大正一一年三月二七日　中川摂太郎宛中川小十郎書翰

（一一）中川家史料43430　大正一一年　月　日　中川摂太郎宛中川小十郎書翰

（一二）中川家史料43504　大正一一年　月　日　中川摂太郎宛中川小十郎書翰

（一三）中川家史料43410　大正一一年六月二五日　中川摂太郎宛中川小十郎書翰

（一四）中川家史料43449　大正一一年七月一四日　中川摂太郎宛中川小十郎書翰
（一五）『新修亀岡市史』本文編三（亀岡市　二〇一一年）三四六頁　馬路村は京都府下で最初に小作人組合が結成された。建碑工事の行われていたこの年の四月、保津峡列車脱線事故で馬路村の不在地主であった田中源太郎（亀岡町）が亡くなっている。その没後に馬路では自小作への農地解放が進められていった。
（一六）中川家史料43434　大正一一年　中川摂太郎宛中川小十郎電報
（一七）中川家史料43415　大正一一年一一月二三日　中川摂太郎宛中川小十郎書翰
（一八）『我がまち馬路』（「馬路町史」編さん委員会　平成二三年）には唱義碑は町民の方から「敗けたものもいるから」と言われ、写真で小さく紹介されている。なお本稿の作成についても、町史編さん委員長の人見淳生氏のご教示をえたことをこの場をかりてお礼申し上げる。
（一九）中川家史料には「勅使御発行日誌」と記された史料が数点ある。同名の写本・罫紙に筆記した写本（11393）、禄左衛門筆記とおもわれる原本（11394）であるが、生家に所在した史料を小十郎が調査。筆記したものと思われる。
（二〇）「私の発見を発見する」『立命館禁衛隊』一五号　一九三一年
（二一）『立命館百年史』禁衛隊の発足四四七頁　禁衛隊の評価については、松岡正美「立命館昭和史の一側面―「禁衛立命」の見方をめぐって―」（『立命館百年史紀要』第五号　一九九七年三月　立命館百年史編纂委員会）
（二二）中川小十郎「創立三五周年をむかえて」（『創立記念論文集』文学部編　一九三六年）
（二三）中川家史料44460～44480
（二四）立命館大学図書館旧蔵資料には、このほか『清声千古』（大正一一年ゲラ刷）・『西園寺卿西征北伐記』（昭和三年ゲラ刷）がある
（二五）『系譜と伝記・国史と系譜』復刻版　昭和六三年　近藤出版
（二六）『姓氏家系大辞典』全三冊　姓氏家系大辞典刊行会　再刊『同』全三冊　角川書店　一九六三年
（二七）同右　一巻末所収

（二八）中川家史料 10204　中川小十郎宛太田亮書簡
（二九）中川家史料 44342　昭和三年五月三一日　中川摂太郎宛中川小十郎書翰
（三〇）中川家史料 43422　昭和三年一〇月一三日　中川摂太郎宛中川小十郎書翰
（三一）中川家史料 43377　昭和三年一一月三日　中川摂太郎宛中川小十郎書翰
（三二）『立命館学誌』一二六号　昭和四年六月
（三三）太田の立命館における経歴については史資料センターの部内史料のご教示をえた。
（三四）『三五周年記念論文集　文学篇』（昭和一一年）
（三五）上久保敏「戦前期の私立大学における「日本文化講義」の展開―関西の私立大学を中心に―」（『大阪工業大学紀要』第六一巻第六号　二〇一六年）、『立命館百年史』（五九二頁）では「国民精神総動員実施要項」の閣議決定をうけ「時局認識ノ強化」に努めるため第一回講義を実施したとあるが、立命館が時局を先取りしたものではなく、他の私学とならび相応の講師を招き開講したものである。
（三六）中川家史料 10204　昭和一四年九月一九日付（消印）中川小十郎宛太田亮書翰
（三七）『立命館大学文学部の五十年』立命館大学文学部　昭和五二年
（三八）中川家史料 10478　昭和一九年二月　中川小十郎宛太田亮書翰